

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (心 理 学)	氏名	真 田 穰 人
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
<p style="text-align: center;">学習意欲を高める協同学習のあり方に関する研究          —被受容感の水準と自己決定理論の基本的欲求理論に着目して—</p>			
論文審査担当者			
主 査	教 授	栗 原 慎 二	
審査委員	教 授	井 上 弥	
審査委員	教 授	児 玉 真 樹 子	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、児童の学習意欲向上をめぐって、自己決定理論の基本的欲求理論の観点から、協同学習の意義、協同学習導入の際の被受容感、児童同士の相互作用、目標設定及び到達度評価による相互評価と学習意欲との関連について明らかにすること、また、学習意欲を高める協同学習のあり方に示唆を与えることを目指した研究である。</p> <p>本論文は、5章から構成されている。</p> <p>第1章では、協同学習と学習意欲に関する先行研究や協同学習の実践と理論を精査している。そして、協同学習導入の結果、学習意欲がどのように高まっていくのかというプロセスが十分に検討されてこなかったという問題点を指摘した上で、児童の学習意欲を高めるための協同学習のあり方についての示唆を得るために、教育心理学及び教育学の知見に基づいて、協同学習が学習意欲を向上させる背景を理論的に検討している。</p> <p>第2章では、自己決定理論の基本的欲求理論による関係性、有能さ、自律性の3つの欲求の促進・充足を意図した特別な介入はされていない一般的な協同学習の導入が、児童の被受容感、児童同士の相互作用及び学習意欲に及ぼす効果と、それらの関連について、小学生を対象に質問紙調査を実施し検討している。その結果、協同学習の導入により、被受容感、児童同士の相互作用及び学習意欲が高まること、被受容感、児童同士の相互作用と学習意欲の協同学習導入前後の差は相互に正の関連をしており、被受容感が相互作用を促進し、学習意欲を促進することを明らかにしている。</p> <p>第3章では、小学生を対象に質問紙調査を実施し、協同学習の導入の際に、被受容感と児童同士の相互作用が学習意欲に及ぼす影響について検討している。その結果、被受容感が児童同士の相互作用を媒介して学習意欲に影響を及ぼしていることを明らかにしている。第2章と第3章から一般的な協同学習の導入の際に、被受容感が高まり、児童同士の相互作用が促進されて、学習意欲が向上することを明らかにしている。また、協同学習導入前の被受容感の水準が学習意欲に及ぼす影響について検討し、協同学習導入前の被受容感の程度によって学習意欲の高まりに差があることを明らかにしている。一般的な協同学習の導入によって被受容感の低群と高群は学習意欲が高まるが、中群は協同学習の恩恵を十分に受けられず、被受容感は一定程度高まるものの相互作用が他の群に比べて促進され</p>			

ないために、学習意欲が高まらない可能性を指摘している。

第4章では、第3章の課題を踏まえ、介入の力点に違いが考えられる被受容感中位群を含めた全ての児童の学習意欲の向上のために到達度評価による自己評価と相互評価を取り入れた協同学習プログラムを開発し、児童の被受容感、児童同士の相互作用及び学習意欲に与える効果を検討している。まず、協同技能に関するルーブリックを作成した上で、小学生を対象に質問紙調査を実施し、ルーブリックを用いた到達度評価による自己評価を取り入れた協同学習プログラムが、児童の被受容感、児童同士の相互作用及び学習意欲に与える効果を検討している。その結果、学習効力感において、自己評価を取り入れた協同学習プログラムの実践の効果が被受容感中群においても示されたが、自律的学習行動や学習意欲全体への効果は限定的であったことを明らかにしている。次に、相互評価に着目し、ルーブリックを用いて到達度評価による自己評価とグループ内の相互評価を取り入れた協同学習が児童の自律的学習行動と学習効力感に及ぼす効果を検討している。その結果、被受容感の低群・中群・高群の全ての群の学習意欲への効果があること、さらに、本プログラムの自律的学習行動、積極的学習行動、学習に関する自我関与、学習効力感と被受容感及び児童同士の相互作用への実践効果を明らかにしている。

第5章では、これらの結果を総合的に考察し、次のような示唆を得ている。(1) 被受容感は、児童同士の相互作用や学習意欲に影響を及ぼす要因であり、児童の学習意欲の向上に重要であるため、被受容感を高めるような対人技能の適切な奨励・訓練・使用、グループの改善手続き、そして肯定的相互依存関係の構築が、学習意欲を高める協同学習プログラムにおいて不可欠な構成要素であること、(2) 被受容感中群の児童は、一般的な協同学習を単に導入しただけでは、学習意欲が高まらず、協同学習の恩恵を受けにくい立場にあるため、その他の児童以上に相互作用の促進に留意する必要があること、(3) 被受容感が中程度の児童を含む全ての児童に対して、ルーブリックを活用して目標を設定してから学習に取り組むとともに、授業の最後に振り返りの時間をとり、目標に対してどれだけ自分が行動できたか考えることで、学習に関する効力感、有能さを高め学習意欲が高まること、また、自己評価に加えてグループ内で相互評価を行い、仲間からのポジティブなフィードバックを受けることで、肯定的な相互依存関係がつけられ、児童が協同学習における個人の責任を感じたり、他者志向動機を高めたりすることで、自律性が促進され学習意欲が高まること、の3点である。

本論文は次の3点において高く評価することができる。

(1) 協同学習導入の際に、被受容感と児童同士の相互作用に着目し、学習意欲が高まるプロセスを解明したこと。

(2) 一般的な協同学習の導入の際に、被受容感の程度によって、学習意欲の高まりに差があるが、到達度評価によるグループ内の相互評価を用いた協同学習では、被受容感の程度に関係なく、全ての層の児童の学習意欲が向上することを明らかにしたこと。

(3) これらの成果を踏まえ、学習意欲を高める協同学習のあり方を提案したこと。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与されるに十分な資格があるものと認められる。

令和3年2月19日